

## 「エンパワーメント」概念の活用状況

— 文献検討を通して —

池田和恵・松尾ひとみ

# A Literature Review on the Application of the Concept of "Empowerment"

IKEDA, Kazue and MATSUO, Hitomi

### はじめに

近年、「患者中心の看護」という発想から、「患者の主体性を尊重」し、いかにして看護へ取り入れるかという発想の転換が唱えられるようになった。本稿は、長年の「患者中心の看護」からの脱却を模索するため、エンパワーメントの概念が看護にどのように活用されているかを把握することを目的に、文献検討を行った。

### 1. 歴史的背景

エンパワーメントは、17 世紀に法律用語として、公的な権威や法律的な権限を与えることとして用いられ、その後 1950～1960 年代にアフリカ系アメリカ人による公民権運動（黒人解放運動）で、運動理念としてエンパワーメントが用いられた<sup>1),2)</sup>。この公民権運動は、1960 年代以降のフェミニズムや同性愛者解放運動、市民運動(消費者運動)、セルフヘルプ、開発途上国の開発、社会福祉、医療と看護、教育などに大きな影響を与えた<sup>3)</sup>。日本では、女性への差別を主要な問題として扱っているジェンダーで多く使われており<sup>4)~6)</sup>、その他では、障害者、被差別部落の人々、先住民、定住外国人などへの差別と偏見を除去しようとする人権運動のなかで用いられている。日本の看護においては、看護ケアがケア対象者の権利や自己決定を尊重し、その人が持てる力を発揮できるように、医療者中心のケアからケアを受けるものとケアを提供する者がパートナーシップを形成し、協働して問題解決に取り組んでいくようにパラダイム変換を促す概念として 1996 年に野嶋<sup>7)</sup>により紹介され、その後 2000 年に入り、使われ始めたといえる（表 1 参照）。

## 2. 概念の意味

エンパワメントは、大辞林では「①力をつけること。また、女性が力をつけ、連帯して行動することによって自分たちの置かれた不利な状況を変えて意向とする考え方。②権限の委譲。企業において従業員の能力を伸ばすためや、開発援助において被援助国の自立を促進するために行われる」とし、広辞苑では「力をつけさせること」とある。英和辞典においては、ジーニアスでは、「empower」は「(人)に[・・・する]権限[機能・能力]を与える」、「empowerment」は「権限を与えること、(少数派集団[民族]への)政治的権力強化」とし、ニューサンライズにおいては、「empower」のみ「[・・・の]権利を強める、(人)に[・・・する]権限(資格)を与える、(人)が[・・・]できるようになる」とある。日本の辞典では、力と幅広くとらえられているが、英和辞典においては、権利や権限とされている。

また、広辞苑においては、第6版より標記されるようになっており、日本においては、エンパワメントは最近では様々な分野で使われているが、まだ新しい概念であることがうかがえる。

エンパワメントは、「社会的に差別や搾取を受けたり、組織の中で自らコントロールしていく力を奪われた人々が、そのコントロールを取り戻すプロセス」<sup>3)</sup>としており、エンパワメントという用語が成立する条件は、本来能力があるのに能力をはく奪された状況下であり、能力を取り戻すプロセスである。エンパワメントが用いられる前提には、パワーレスな状態とみなされる者がいると客観的に外側から俯瞰している視点があるともいえる。久木田、渡辺<sup>3)</sup>が述べる、「社会的な問題に接し、多くは危機感を持って、それらの問題の解決とその解決を可能にする構造的な社会変革を起こそうとしている人々」が俯瞰者であるといえる。そして、もともと持っている能力を取り戻していく過程には、「構造的な社会変革」をしなければならぬ状況にあるといえ、そこでは、そこにおけるものの捉え方を変え、状況を変えていっており、パラダイムシフトが生じている。

看護では、看護学大辞典において「自分の生活や置かれている状況を自らコントロールしていくプロセス」とあり、看護大辞典では、「あるコンテキストのなかで無力だと思われる人やグループの潜在能力をみとめ、意思決定や参画の機会を提供することで、その人やグループがパワーを自覚し、発揮していく過程であること」であり、看護学学習辞典には、「**社会的な弱者、差別や搾取を受け、自らをコントロールしていく力を奪われた人が、本来もっている力を取り戻していく過程**」であるとしたうえで、看護分野では、「患者が自らの問題を自分で解決できるようにするために、**患者に本来備わっている能力を引き出すよう働きかけることを意味する**」としている。看護においては、患者自身が問題をもつことから出発しており、患者自身の問題が本人の能力を奪っているとしており、他者との関係において、力を奪われているとはしていないことがわかる。ただ、保健医療関係者(専門職)との関わりが必要となった者が、専門職者の場に入り、その場において、専門職者が持つ知と差があるということにおいては、弱者、制限を受けている立場であるといえ、その意味では、久木田、渡辺<sup>3)</sup>が述べている概念と同じであるといえる。

### 3. 概念の活用範囲

Bob Anderson, Martha Funnell<sup>8)</sup> は、糖尿病の治療と教育を、コンプライアンス<sup>1)</sup>やアドヒアランス<sup>2)</sup>であると受け止め、医療者が管理することから患者中心で共同的なアプローチという方法に変えることにより患者の自己コントロールする力を伸ばすことができている。ここでのエンパワーメントは、従来の指導者と遵守者という関係から、「糖尿病自己管理の主体は患者さんであり、医療者の役割は専門家として情報提供や問題解決の援助をしていくことであり、見守っていくことである」という医療構造を変革させる意図が仕込まれており、医療の場において、アプローチ法や医療者側の姿勢の模索がなされていた。また、森<sup>9)</sup> は、新しいがんサバイバーシップの概念と治療の場の中心が病棟から外来への移行する際中にあり、患者の主体的な取り組みに対する期待が高まる中、化学療法を受ける患者の看護の重要な軸としてエンパワーメントを位置付けている。野嶋や中野<sup>10)</sup> が述べるように家族看護における家族の捉え方が、背景として・資源としての家族から、ケアの対象としての家族としての視点のシフトが行われ、看護者が家族にケアを実践できるように家族エンパワーメントが謳われ、先に述べた家族の視点のパラダイムシフトが行われるように看護者側の教育もなされている。同様に認知症や精神疾患患者の介護者や医療職者の分野においても自らの力を発揮できるように勉強会が開催されたりもしている。前述したように、看護実践においては、患者や家族がもっている力を発揮できるようになるために、ケア提供者側のケアの提供の仕方、対象のとらえ方などの変容が求められていることがわかる。すなわち「対象者のエンパワーメントを引き出すことができるかどうかは、看護者自らがどのようにエンパワーしているかに関与していると指摘されている」<sup>7)</sup> といわれているように、パワーレスとみなされる患者や家族のエンパワーメントを引き出すことができるように、それを取り巻く社会、看護者や介護者への啓蒙が実施されている状態であるといえる。すなわち、パワーレスな状況であるというより、パワーレスな状況とみなしてしまう看護者の偏見をなくすための教育、エンパワーできるための知識の普及といったものへの契機としてエンパワーメントが使われているといえる。

同様に、門間<sup>11)</sup> は、保健師のエンパワーメントを『仕事の意義と自身の能力や可能性を認め、他者との関係、仕事内容をコントロールしながら積極的に能力を発揮する保健師の姿勢』と定義付けていることから、パワーレスとみなされる対象者が、専門職者であり、専門職者としての能力をつけることが謳われており、一般的な概念と比べて、力不足という点のみでつかわれており、エンパワーメントの概念は、広がりをもっていることがわかる。

概念や定義があいまいであったため、パワー内容は具体的にされてこなかったが、亀

<sup>1)</sup> (看護における) 患者の健康回復、あるいは健康増進のために必要であると考えだした医療者の指示に患者が応じ、遵守しようとする事 (看護大事典)

<sup>2)</sup> 医療職者の指示する養生法を続けるか否か、またどの程度実行しようとしているかについて、医療職者の視点のみでなく、より生活者の視点で考えた概念。自分自身を支えるために、自分自身が責任をもち、自分自身でたゆまず努力することで病気の養生法を続けていくことを意味する。本来は固守、あるいは強固な支持という意味がある。コンプライアンスが医師の指示遵守という受動的姿勢であるのに対して、より患者の主体性を考え、患者が積極的・能動的に治療方針の決定や実行にかかわる意味をもつ。(看護大事典)

田<sup>12)</sup>が、「妊婦のエンパワーメントとは、他者や環境との相互作用を通じて、自分が望むような妊婦生活や出産ができるように、内発的な心理エネルギーが増大することである」とし、「Self-Efficacy」「将来のイメージ」「Self-Esteem」等を含む因子で構成されると明らかにした。尺度全体の Cronbach's  $\alpha$  係数は 0.89、サブスケールの  $\alpha$  係数は 0.80～0.67 であり、尺度の内的整合性が確認されており、尺度の基準関連妥当性が、尺度の合計得点と Locus of Control 尺度得点との相関係数は、0.517 ( $p < 0.001$ ) であることで支持されており、信頼性や妥当性もあるといえる。他の領域での研究も必要であるといえる。

以上より、看護におけるエンパワーメントの概念の活用範囲は柔軟に使われ、エンパワーメントの「力をつける」面に着目しつつ、「(力を発揮できるように) 状況を変えていく」契機となり、看護の多様化へと発展していると考えられる。

## おわりに

従来の「患者中心の看護」というパターンリズムから脱却するためには、看護師が役割行動をとる前に、患者と看護師自身の能力を信頼することが、最も重要であることが示唆された。

## 引用文献

- 1) 久木田純. エンパワーメントとは何か. 久木田純, 渡辺文夫編. 現代のエスプリ No.376 エンパワーメント: 人間尊重社会の新しいパラダイム. 至文堂, 1998, p. 10-34.
- 2) 古寺久仁子. 精神保健福祉分野のエンパワーメント・アプローチに関する考察. ルーテル学院研究紀要, 2007, No. 41, p. 81-96.
- 3) 久木田純, 渡辺文夫. はじめに. 久木田純, 渡辺文夫編. 現代のエスプリ No.376 エンパワーメント: 人間尊重社会の新しいパラダイム. 至文堂, 1998, p. 5-9.
- 4) 川橋幸子. わかりやすい男女共同参画政策と女性のエンパワーメント. 労働教育センター, 1998, p.31.
- 5) 國信潤子. “動き出したグローバルネットワーク”. 岩崎久美子, 中野洋恵編著. 私らしい生き方を求めて—女性と生涯学習. 玉川大学出版部, 2002, p. 265.
- 6) 村松安子, 村松泰子. エンパワーメントの女性学. 有斐閣, 1995, p.12.
- 7) 野島佐由美. エンパワーメントに関する研究の動向と課題. 看護研究, 1996, vol. 29, no. 6, p. 3-14.
- 8) Bob Anderson, Martha Funnell. 石井均訳. 糖尿病エンパワーメント. 第2版. 医歯薬出版, 2008.
- 9) 森文子. がん化学療法を受ける患者のエンパワーメント. 西修長宏, 渡邊孝子編. がん化学療法看護. 南江堂, p. 35-37.
- 10) 野島佐由美, 中野綾美. 家族エンパワーメントをもたらす看護実践. ヘルス出版, 2006.
- 11) 門間晶子. 保健婦のエンパワーメントの構造と規定要因の分析. 日本看護科学会誌, 2000, vol. 20, no. 2, p. 11-20
- 12) 亀田幸枝. 妊婦のエンパワーメントスケールの作成 (Development of an empowerment scale for pregnant women) (英語). 金沢大学つるま保健学会誌, 2008, vol. 32(1), p. 39-48.

## 参考文献

- 安梅勅江. コミュニティ・エンパワメントの技法. 当事者主体の新しいシステムづくり. 医歯薬出版, 2005, p. 5
- Creasia, J. L.; Parker, B. *Conceptual Foundations of Professional Nursing Practice*. Mosby Year Book, 1996.
- Gibson CH. A concept analysis of empowerment. *Journal of Advance Nursing* 16. 1991, p.354-361.
- Hawks, J. H. Empowerment in nursing education: Concept analysis and application to philosophy, learning and instruction. *J. Adv. Nurs.* 1992, vol.17, no. 5, p. 609-618.
- John Friedmann. 斉藤千宏, 雨森栄一監訳. 市民・政府・NGO—「力の剥脱」からエンパワメントへ. 新評論, 1992, (1995), p. 9.
- 片田範子. 研究成果を实践に根付かせるための専門看護師を活用した臨床—研究連携システムの構築—『家族看護エンパワメントガイドライン』の小児看護実践への導入と効果の検証を通して—. 基礎研究(A) 研究成果報告書, 2008, p. 1, p. 155.
- Mok E. et al. Individual Empowerment among Chinese Cancer Patients in Hong Kong. *Western Journal of Nursing Research*. 2004, vol. 26, no.1.
- 中野綾美. 家族エンパワーモデルと事例への活用. *家族看護*, 2004, vol. 2, no. 2.
- 中野綾美. ナーシング・グラフィカ 28 小児看護学—小児の発達と看護. メディカ出版, 2006, p. 204.
- Post-White J. Empowering patients and families receiving outpatients cancer treatment. 第13回日本がん看護学会学術集会サテライト講演集, 1999, p. 10.
- Robertson A.; Minkler M. New health promotion movement: A critical examination. *Health Education Quarterly*. 1994, vol. 21, no. 3, p. 295-312.
- Rappaort J. Terms of empowerment/exemplars of prevention: Toward a theory of community psychology. *American Journal of Community Psychology*. 1987, vol. 15, p.121-148.
- Harmon, S. M.; Boyd, S.T. 村田恵子他訳. 家族看護学—理論・実践・研究. 医学書院, 2001, p. 263.
- Segal, SP. et al. Measuring empowerment in client-run self-help agencies. *Community Mental Health Journal*. 1995, vol. 31, no. 3, p. 215-227.
- Simmons & Pasons. Empowerment for role alternatives in adolescence. *Adolescence*. 1983, p. 18-69, p. 193-200.
- Solomon, B. *Black Empowerment: Social Work in Oppressed Communities*. Columbia University Press, 1976.
- Wallerstin, N.; Bernstein, E. Empowerment education: Freire's ideas adapted to health education. *Health Educ Q*. 1988, vol. 15, p. 379-394.
- Wallerstin, N. Powerlessness, Empowerment, and Health: Implications for Health Promotion Programs. *American Journal of Health Promotion*. 1992, vol. 6, no. 3, p. 197-205.
- 安酸史子他. ナーシング・グラフィカ 22 成人看護学—成人看護学概論. メディカ出版, 2004, p. 114.
- Zimmerman, M.; Rappaport, J. Citizen participation, perceived control and psychological empowerment. *American Journal of Community Psychology*. 1988, vol. 16, no. 5, p. 725-750.

(2011年1月4日受理)

時期	アメリカ	アメリカ 看護	日本	日本 看護
17C	法律用語 公的な権威や法的な権限を与えること			
第2次世界大戦後 1950年代～1960年代 1970年代	(久木田) 公民権運動 カウンセリング フェミニズム運動 社会的に差別や搾取を受けたり、自らコントロールしていく力を奪われた人々が、そのコントロールを取り戻すプロセス→社会福祉、開発途上国の開発、医療と看護、教育など様々な領域で使われる。 社会的なプロセスを表す言葉 パラダイムのシフト (野嶋) セルフヘルプの活動			
1976	黒人(ソロモン) 「ソーシャルワーカーもしくはその他の専門家がスティグマ化されている集団に属しているために差別されていることから生じているパワーの欠如状態を減らすことをもて、クライエントの一連の活動に携わる過程」			
1983		思春期 (Simmons& Pasons) 「人が彼らの環境を支配し、自己決定を達することを可能にするプロセス」		
1984		精神保健 (Rapport) 「もっとも広い意味では、人や組織や地域社会が自らの生活を熟すること」		
1986	オタワ憲章 「人々や組織、コミュニティが自らの生活への統御を獲得する過程である」 「人々が自分の健康に影響のある意志決定と活動に対し、より大きな支配力(原語 control)を得る過程である」			
1987	コミュニティ(Rappoport J) 「人々、組織あるいはコミュニティが自らをコントロールするプロセス」			
1988	コミュニティ(Zimmerman, Rappaport) 「個人が自分の生き方を主体的に生き、コミュニティでの生活に民主的な参加を獲得するプロセス」	健康教育(Wallerstin) 「コミュニティやより広い社会において、自分たちの生活を掌握していくことへの、人々や組織やコミュニティの参加を促進していくソーシャル・アクションの過程」		
1990		エンパワーメント・アプローチモデル (Funnell MM)		
1991		糖尿病療養指導士(Bob Anderson) 「糖尿病を管理するために、患者が潜在的な能力を見つけ出し、使用できるよう援助すること」 アメリカ看護協会 看護にエンパワーメントを「On Specialization in Nursing: Toward a New empowerment」看護者のエンパワーメントする方法が議論される。 文献検討より(Gibson CH) 「人々が、自己の問題を発見し、解決し、自己の生活をコントロールしている感覚を得るために必要な資源を活用する能力について認識し、その能力を発揮し高めていく社会的な過程」 「健康を増進したり、コントロールを強化するように、可能となさしめる過程」		

1992	市民、政府、NGO(John F) 「力をつけること、あるいは力を獲得すること」	看護教育 (Hawks) 「その人が目標を達成することができるように、その人の能力を育成、発展、強化するために、機会や資源を提供すること」 ヘルスプロモーション(Wallerstin) 「個人やコミュニティの統御の増加や社会的効力、コミュニティが自分たちの生活の質の向上と社会正義を目標とした人々や組織、コミュニティの参加を促進するソーシャルアクションの過程」		
1992～1993		まずは、看護管理より導入された。看護のエンパワーメント、看護者のエンパワーメント (野嶋)		
1994		ヘルスプロモーション(Robertson A) 「自らの生活を決定する要因をコントロールする能力を引き出すこと」		
1995	第4回世界女性会議 成人教育のキーワード 「性別や経済的格差などの要因から社会的に弱い立場にある人々を、意思決定や実行、評価過程に参加させていくことにより、自己の尊厳と自信を回復し、自らの状況を改善するための能力を獲得すること」 「経済的、社会的、文化的及び政治的意思決定の完全かつ平等な分担を通じて、公的及び私的生活のすべての分野への女性の積極的な参加に対するあらゆる障害の除去を促進すること」を目標として「力をつけること」 コミュニティ(Segal SP) 「パワーレスな人々が自らの生活をコントロールする能力を獲得し、生活する組織・社会構造に影響を与えるプロセス」	エンパワーメントの測定用具の開発が進む (野嶋)	女性学 (村松) 「自分たちで自分の状態・地位を変えていこうとするきわめて行動的で自立的な考え方」  教育実践	
1996		看護 (Creasis,J.L) 看護にとって重要な概念の1つ。患者がコントロール感を再獲得するためのアプローチ 家族看護(S.M.Harmon,S.T.Boyd) 「相手が目標達成できるように情報や資源を提供するプロセス」		
1998		(久木田) 「社会的に差別や搾取を受けたり、組織の中で自らコントロールしていく力を奪われた人々が、そのコントロールを取り戻すプロセス」	(久木田) 「すべての人間の潜在能力を信じ、その潜在能力の発揮を可能にするような人間尊重の平等で公平な社会を実現しようとする価値」 女性学 (川橋) 「内なる力を蓄えること—自分の人生は自分が選択肢、自分が決定するという『自己決定権』の基礎、基盤をつくるもの」	
1999		がん看護(Post-White J) 「患者とその家族が現在もちうる力を高め、必要なときには必要な資料や支援を提供すること」		
2002			女性学 (國信) 「社会的に自立するための多様な能力を個人の精神的な内面からつけていくこと」であり、「その基盤にあるのが自己決定をするための知識・技能の獲得である」	

2004		がん看護(Mok E) 「プロセスである」		患者教育 (安酸他) 一般的には「自分の中に力を蓄え、積極的な自己をつくり出すことによって問題を解決しようとするもの」 看護学において「患者に自分自身のケアについての決定権を譲る、あるいは与えること」 健康教育において「個人や組織が、健康によりよい栄光を及ぼす行為や意思決定を、自らできるようにするプロセス」
2004				家族エンパワーモデル (中野) *
2005			コミュニティ (安梅) 「元気になること、力を引き出すこと、そして共感に基づいた人間同士のネットワーク化である」	
2006				小児 (中野編) 力が発揮できない状況を克服し健康が促進されることを目的とする健康教育の考え方として導入され、現在では自分の置かれている状況を自らコントロールしていく過程
2007				がん看護(森) 「患者や家族自身が自己の持つ可能性を知り、自らの力を強化し、高め、その力を十分に発揮することにより、生きる意味を見出す力を得ていく過程をともに辿ること」

\*家族エンパワーモデル「家族とは主体的な存在であり、家族自身の力で様々な状況乗り越えていくことのできる集団である。しかし、家族員の病気など、家族で解決できない状況にある時は、その家族は家族ケアを必要としており、家族をエンパワーメントする援助を必要としている」「家族をケアの対象として位置づけ、家族が持てる力を発揮して健康問題に積極的に取り組み、健康な家族生活が実現できるように予防的・私事的・治療的な援助をおこなうもの」

「個人が自己の生活をコントロール・決定する能力を開発していくプロセス」(片田 2008)

「元気になること・力を発揮すること」(片田 2008 ガイドライン)

\*家族看護の視点「背景としての家族」「資源としての家族」→「ケアの対象としての家族」のパラダイムシフトを含んでいる。(野島・中野)

安梅勲江,コミュニティ・エンパワメントの技法,当事者主体の新しいシステムづくり,医歯薬出版株式会社,2005,p.5.

Anderson, Bob.; Funnell, Martha. 石井均訳. 糖尿病エンパワメント. 第2版. 医歯薬出版,2008.

Creasia, J. L.; Parker, B. Conceptual Foundations of Professional Nursing Practice. Mosby Year Book. 1996.

Gibson, CH. A concept analysis of empowerment. Journal of Advance Nursing 16. 1991. p. 354-361.

Hawks, J. H. Empowerment in nursing education: Concept analysis and application to philosophy, learning and instruction, J. Adv. Nurs. 1992, vol. 17, no. 5, p. 609-618.

Friedmann, John. 齊藤千宏, 雨森栄一監訳. 市民・政府・NGO—「力の剥脱」からエンパワメントへ. 新評論, 1992, (1995), p. 9.

片田範子. 研究成果を実践に根付かせるための専門看護師を活用した臨床—研究連携システムの構築—『家族看護エンパワメントガイドライン』の小児看護実践への導入と効果の検証を通して—, 基礎研究(A) 研究成果報告書, 2008, p.1, p.155.

川橋幸子. わかりやすい男女共同参画政策と女性のエンパワメント. 労働教育センター, 1998, p. 31.

久木田純. エンパワメントとは何か. 久木田純, 渡辺文夫編. 現代のエスプリ No.376 エンパワメント: 人間尊重社会の新しいパラダイム. 至文堂, 1998, p. 10-34.

國信潤子. “動き出したグローバルネットワーク”. 岩崎久美子, 中野洋恵編著. 私らしい生き方を求めて—女性と生涯学習, 玉川大学出版部, 2002, p. 265.

Mok, E. et al. Individual Empowerment among Chinese Cancer Patients in Hong Kong. Western Journal of Nursing Research. 2004, vol. 26, no. 1.

森文子. がん化学療法を受ける患者のエンパワメント. 西修長宏, 渡邊孝子編. がん化学療法看護. 南江堂, p. 35—37.

村松安子, 村松泰子. エンパワメントの女性学. 有斐閣, 1995, p. 12.

中野綾美. 家族エンパワーモデルと事例への活用. 家族看護, 2004, vol.2, no. 2.

中野綾美. ナーシング・グラフィカ 28 小児看護学—小児の発達と看護. メディカ出版, 2006, p. 204.

野島佐由美, 中野綾美. 家族エンパワメントをもたらす看護実践. ヘルス出版, 2005.

野島佐由美. エンパワメントに関する研究の動向と課題. 看護研究, 1996, vol. 29, no.6, p. 3-14.

Post-White, J. Empowering patients and families receiving outpatients cancer treatment. 第13回日本がん看護学会学術集会サテライト講演集, 1999, p. 10.

Robertson, A.; Minkler, M. New health promotion movement: A critical examination. Health Education Quarterly. 1994, vol. 21, no. 3, p. 295-312.

Rappoport, J. Terms of empowerment/exemplars of prevention: Toward a theory of community psychology. American Journal of Community Psychology. 1987, vol. 15, p. 121-148.

Harmon, S.M.; Boyd, S. T. 村田恵子他訳. 家族看護学—理論・実践・研究. 医学書院, 2001, p. 263.

Segal, SP. et.al. Measuring empowerment in client-run self-help agencies. Community Mental Health Journal. 1995, vol. 31, no. 3, p. 215-227.

Simmons & Pasons. Empowerment for role alternatives in adolescence. Adolescence. 1983, p. 18-69, p. 193-200.

Solomon, B. Black Empowerment: Social Work in Oppressed Communities. Columbia University Press, 1976.

Wallerstin, N.; Bernstein, E. Empowerment education: Freire's ideas adapted to health education. Health Educ Q. 1988, vol. 15, p. 379-394.

Wallerstin, N. Powerlessness, Empowerment, and Health: Implications for Health Promotion Programs. American Journal of Health Promotion. 1992, vol. 6, no. 3, p. 197-205.

Zimmerman, M.; Rappoport, J. Citizen participation, perceived control and psychological empowerment. American Journal of Community Psychology. 1988, vol. 16, no. 5, p. 725-750.

安酸史子他. ナーシング・グラフィカ 22 成人看護学—成人看護学概論. メディカ出版, 2004, p. 114.